The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	権力・場・主体 ： フーコーとブルデューの社会分析
Author(s)	松川, 絵里
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2009, 43, p. 47-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7732
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

権力・場・主体

――フーコーとブルデューの社会分析――

松　川　絵　里

はじめに

ミシェル・フーコーは、その権力論において「抑圧／解放」という図式で権力を語る法的モデルに基づく権力論を批判し、知と権力の内在的関係を主張する新しい権力概念を提示した。それによれば、私たちは、自らの意志にしたがって行動しているにもかかわらず、知を通して無意識のうちに社会的制約を受けていると考えられる。一方、ピエール・ブルデューもまた、その社会分析において、私たちの判断や行動が、所属している社会集団に固有の知覚・判断・行動図式の体系によって、無意識のうちに厳密に方向づけられていることを示した。彼らの社会分析は、権力を、行為を抑圧するものとしてではなく、行為の産出そのものに関わる生産的な性格をもつものとして捉えている点で一致している。そして、その分析理論は、性という切り口から社会的な制度が私たちの生活に与える影響について論じてきたジェンダー・セクシュアリティ研究に多大な影響を及ぼしてきた。

にもかかわらず、ジェンダー・セクシュアリティ研究における彼らの評価は全く異なるように思われる。フーコーが、セックスの社会的構築を論じたことで高い評価を得る一方で、ブルデューの分析は「性別カテゴリーを前提してしまっている」と批判される[1)]。また、ブルデューの社会理論が男女のあいだにみられるジェンダーの非対称性の分析に用いられるのに

対し[2)]、フーコーは、男女のあいだにみられる非対称性や支配関係を無視している、つまり「ジェンダー・ブラインド」であると批判される[3)]。一体、このような評価の差異は何に由来しているのだろうか？

本稿では、この問いに答えるため、「場」という視点からそれぞれの社会分析論の特徴を明らかにし、その差異がジェンダー・セクシュアリティ研究にもたらす決定的な方向性の違いを示したい[4)]。

1．ブルデューの社会理論「実践の論理」

1．1．ハビトゥスと実践

ブルデューによれば、私たちの行動は、主観主義的な自律した主体の決断に一切を負っているのではなく、また、客観主義的な規則に一方的に従っているのでもなく、ある集団で共有される知覚・判断・行動図式であるところの「ハビトゥス(habitus)」によって厳密に方向づけられている。

ハビトゥスとは、明白に意識されることなく規則的な振舞いを産み出す「心的諸傾向のシステム」であり、実践と表象を産出・組織する原理として機能する「構造化する構造」であると同時に、実践を通して生成される「構造化された構造」でもある(Bourdieu 1980:88=83)。

ハビトゥスによって実践が方向づけられ、実践を通してハビトゥスが形成される仕組みを、ブルデューは次のように説明する。行為者は、目前の客観的状況に適合する行為を瞬時に把握しそれを実行するが、その予測は過去の実践に基づいている。知覚の組織化を含むハビトゥスは、過去の経験に基づいて、目前の状況で起こる確率の高い実践を「可能なもの（考えられること)」として選択する一方で、確率の低い実践を「不可能なもの(考えられないこと)」として無意識のうちに排除してしまう。そして、行為者は、目前の状況と似通った状況において最も多く起こった過去の経験を「自明の経験」として受け取り、それを反復することになる。

全き発明術としてのハビトゥスが、数の上では無限で、（対応する状況と同様に）相対的には予見不可能な実践、しかしその多様性においては限界のある実践の生産を可能にするのだ、ということである。要するに、客観的な規則性の生産物たるハビトゥスは、それら規則性が設ける限界内で「理に適った」、「常識」に属すすべての振舞いを、それだけを産み出す傾向をもつ。（Bourdieu 1980:93=88〔強調＝原文〕）

このように、知覚・思考・行為を限界づけるハビトゥスは、過去の実践の反復を通じて生成される。そして、このシステムを通じて産出される実践や表象は、「客観的に『調整を受け（réglé）』、『規則的で（régulier）』ありうるが、いかなる点でも規則（règle）への従属の産物ではない」（Bourdieu 1980:88=83-84）。このシステムは、客観主義が用いる抽象的な理論図式とは異なり、ある状況における規則的な経験として、実践を通じて見いだされるものである。

1．2．場と権力闘争

だが、実践はハビトゥスだけによって方向づけられるのではない。ブルデューによれば、私たちの実践は〈場〉によっても限界づけられている。

「場（champ）」とは、一般的に、「文学」や「科学」、「政治」など、社会的領域の区別を指し示す言葉として用いられるが、ブルデューは、これを、支配的位置への到達という共通の目標のもと権力闘争が繰り広げられる社会的圏域として捉えている。

それぞれの場には、その場に固有のハビトゥスが対応しており、場の成員はこのハビトゥスを通して、その場で繰り広げられる闘争（ゲーム）のルール、目標、掛金などを当然のものとして受け入れる。この「実践的信念」は、あらゆる場が秘かに強制するゲームへの参加権となっており

(Bourdieu 1980:113=108)、場の機能の条件にして、その産物でもある。つまり、それぞれの領域において行為者の行為を可能にする自明の経験は、場がハビトゥスを条件づける一方で、ハビトゥスが場を生成するという相互作用のなかで生成される[5)]。

また、闘争において目指されるべき最終目標は、場において最上位を占める階級によって示されるが、すべての成員が一様にそれを目指すわけではない。各々の行為者が到達するのに「ふさわしい」位置は、その行為者が予め場において占める位置によって異なる。

> 実践は計算上にしか存在しない抽象的・非実在的な観念にすぎない利益の平均的チャンスなるものに依存しているわけではなく、別個の行為者ないし行為者の集合が有する彼ら特有のチャンスに依存している。(Bourdieu 1980:106=102)

場のハビトゥスを通じて、場の成員はそれぞれがもつ特性に応じて、最も支配的な階級から下位の階級まで序列的に位置づけられ、同じ位置にある成員のあいだでは似通った客観的条件のもとで、「階級的なハビトゥス」が形成される。そのハビトゥスを通じて、各々の行為者は、自分が占める位置から、すぐ上の階級によって示される特性を「我々にとって」「到達可能なもの」として受け取り、さしあたりはそれを目指すことになる。

このことから、ブルデューは、行為者の行動の大半を説明するのは、その行為者が場において占める位置であると主張する。たとえば、ある政治家が行うことを理解するためには、誰が彼に投票したか、彼の選挙基盤は何か、彼の社会的出身は何かを調べるだけでなく、その人が政治界(le champ politique)というミクロコスモスのなかでどのような位置を占めるかを調べなければならない(Bourdieu 2000:57-58=83)。

以上から、ブルデューは、場とそこで繰り広げられる行為者間の権力闘

争を、実践を条件づけるコンテクストとして捉えていることがわかる。

2．フーコーの言説分析

2．1．言説的実践と編成の規則

フーコーの場(champs)の区別に関する意識は、「言説（discours)」という概念のうちに見いだすことができる。

> たとえば、経済学、生物学、精神病理学などに属すると自らみなす――そしてこのことがいつからであるかは容易に示しうる――様々な言表がある。また、ずっと昔からある――ほとんど生誕が定かにならない――諸言表、文法や医学と呼ばれる諸言表がある。だが、これらの統一性とは何だろうか？　(Foucault 1969:44=50)

諸言表（énoncés）がある統一性をもって編成されるとき、その集合が「言説（discours)」と呼ばれるが、　フーコーは科学的言説のもつ社会的機能への関心から、言説を言説一般ではなく、「様々な言説をその特殊性において明確化すること」（Foucault 1969:182=211)が必要だと主張する。 そこで、言説分析では、それぞれの言説において言表を結びつけている「編成の規則（règles de formation)」を明らかにすることが目指される。

これに対して、『知の考古学』では4つの仮説、すなわち①唯一の同じ対象、②一定の叙述スタイル、③概念の一貫性、④テーマの同一性が検討されている。だが、結局そのいずれによっても説明できず、むしろ、それぞれの言説の特徴は、それらの分散（共存、保存、変容、消滅）のうちにしか見いだされないという結論に至る。そして「そこから、これらの分散(dispersion)そのものを記述するという考え方が出てくる」(Foucault 1969:52=59)。

> いくつかの言表の間にかような分散の体系が記述されうる場合には、諸々の対象、言表の類型、概念、主題の選択などの間にある規則性（様々な相関関係、位置、作用、変換に関する一つの秩序）が明確化されうる場合には、ひとつの〈言説の編成〉に関わる、と慣習上言われるであろう。……編成の規則とは、与えられた言説的分布における存在（のみならず、共存、保存、変容、消滅など）の条件である。（Foucault 1969:53=60）

つまり、「編成の規則（règles de formation）」は、何が語られ何が語られないかという言表の「規則性（régularité）」として見いだされる。諸言表を結びつけ、言説の統一性と社会的役割を可能にする「編成の規則」は、言表に内在するものでも外在するものでもない。それは、語る／書くという実践のなかで経験的に生み出されるものである。

ここに、私たちはブルデューの「ハビトゥス」との共通点を見いだすことができる。フーコーとブルデューはともに、社会分析の基礎を実践に置き、私たちの実践を制約する社会的な規範が、実践を通じて生み出され、実践を通じて見いだされるものであることを主張している。

2．2．〈知〉と権力

言説分析のなかで明らかにされる諸要素の総体、すなわち、ある言説的実践によって規則的な仕方で編成された諸要素の総体を、フーコーは、〈知（savoir）〉と呼んでいる（Foucault 1969:238=276）。認識の問題が常に真偽の判断に関わるのに対し、知は真偽が問われる以前の語るという営みに関わる。知とは、文字通り「～できる（savoir）」に関わるもの、実践を可能にするものである。知は、「言説的実践としての科学の存在、および他の諸実践のなかでのその働き」（Foucault 1969:241=279-281）に関わる。そこ

で言説分析では、「言説の領野のうちの様々な言表およびそれらの持ちうる諸連関を記述」すること(Foucault 1969:44=50)を通じて、各々の言説を可能にする〈知〉を浮かび上がらせることとなる。

しかし、フーコーによれば、このような〈知〉の様態は、ひとつの言説のなかの諸連関を分析するだけでは明らかにすることはできない。たとえば、施療の領野は、臨床医学的言説によって研究所と連関をもつようになるいなや、その処方の方法、医者が受け入れる規約、まなざしの機能、そこで遂行されうる分析のレヴェルなどの変容を被った(Foucault 1963)。ある領域の存在と変容を捉えるには、ひとつの言説のなかにおける言表の諸連関のみならず、言説と言説との関係(言表郡の諸連関)、あるいは言説と非言説とのあいだの関係(諸言表や言表郡と、技術的・経済的・社会的・政治的な出来事とのあいだの諸連関)をも調べる必要がある。

『言葉と物』(Foucault 1966)では、「ある一定の時代にとって、諸科学のあいだで—それらが言説の規則性のレヴェルで分析されるときに—発見されうる諸連関の総体」(Foucault 1969: 250=290-291)が〈エピステーメー〉[6]と呼ばれ、それぞれの時代において認識論的形象や科学の存在を可能にした知のあり方や、言説に課された拘束や制限のはたらきが明らかにされている。

また、後期権力論では、複数の領域の相互作用により〈知〉が形成される様子が、「装置」という概念を導入することによってより動的に捉えられている。“dispositif”とは、「ある計画に応じて配置される手段全体」を表わす軍事用語である。固定した建築的・器具的・道具的装置を表わす“appareil”とは異なり、個別の戦略が状況に応じて配置を変えながら共同してはたらく「展開装置」を表わす。『性の歴史Ⅰ 知への意志』(Foucault 1976)では、告白という制度と精神医学や教育学、人口学などの言説的実践が結びつくことによって、それぞれ特殊な役割を担いながら

もその相互作用によって、セクシュアリティという認識対象を出現させる様が、「セクシュアリティの装置(dispositif de sexualité)」として分析されている。

そして、「権力」とは、このような知に内在する「無数の力関係」(Foucault 1976:121=119)と考えられる。権力は、ある個人が保有したり手放したりするようなものでも、言説に外在し言説のコンテクストとなるものでもない[7)]。真理の産出や知を通して私たちの社会的実践を可能にする「力(pouvoir)」である。「権力と知とが一つの仕組みに結び付けられるのは、まさに言説において」(Foucault 1976:133=129)であり、その働きは、やはり言説分析のなかで言表の連関を通して捉えられる。

以上のような、実践を可能にし、諸領域(champs)の存在と変容に関わる〈知〉というテーマから、フーコーは一貫して、場(champs)を実践のコンテクストとして捉えるのではなく、場(champs)の生成そのものに関わる〈知‐権力〉を問題にしているといえるだろう。

2．3．主体＝position

ブルデューが場において行為者が占める社会的位置から実践を説明しようとするのに対して、フーコーは、〈知〉を通して実践が社会的に制約されていることが論じられていることが明らかになった。それでは、フーコーの言説分析において主体はどのように捉えられているのだろうか？　ここでは、『知の考古学』における「主体」概念の特徴を確認したうえで、後期権力論で展開される〈主体化〉との一貫性を指摘しておきたい。

一般に言表の主体として思い浮かべられるのは、その言表を発声したり書き記したりする個人、つまり作者だろう。しかし、フーコーが「言表の主体」というとき、それは「作者」と同一ではない。

『知の考古学』では、数学の論文の例が挙げられている。どのような状

況のなかでなぜその論文が書かれたかを説明する前書きにおいては、言表の主体の位置は作者によってしか占められえない。だが、論文の本論そのものにおける「第三の量に等しい二つの量は、互いに相等しい」といった命題においては、すべての個人が言表の主体の位置を占めることができる。

このように、言説分析において言表の主体は、「確定された、空の—実際には相異なった諸個人によって充たされうる——一つの場所」(Foucault 1969:125=144)として捉えられている。

> 言表としての一つの定式的表現を記述すること〔言表の連関を記述すること〕は、作者と彼の言ったこと（あるいは言おうと欲したこと、あるいは意図せずにいったこと）とのあいだの諸関係を分析することにあるのではなく、すべての個人がその主体となりうるために占めうる、あるいは占めるべき位置(position)がいかなるものかを決定することにある。(Foucault 1969:126=145)

それは、必ずしも作者という特定の個人でもなければ、普遍的な個人というわけでもない。たとえば処方箋などの場合、言表の主体の位置はそれを記した個人以外にも占められうるが、その範囲は普遍的個人よりずっと限定されたものになるだろう。また、この「主体＝位置」は言説的実践に先立って言説的実践を条件づけるものではなく、言説的実践を通して言説的実践と同時に生成されると考えられる。

実践を通じて生成される主体という考えをより明確に表すのが、後期権力論で示される〈主体＝服従化(*assugettissement*)〉(Foucault 1976)の概念である。フーコーは“sujet”という言葉がもつ二つの意味、すなわち「服従する者（臣下）」と「主体」に触れ、実践を可能にする社会的規範（編成の規則）に従うことによって、初めて「主体」の存在が可能になると主張する。そして、そのような主体そのものの生成に関わる社会的な力が〈知

‐権力〉と呼ばれる。フーコーは主体の存在を否定するわけではないが、主体の先在性については否定する。

つまり、フーコーの社会分析においては、主体間で繰り広げられる権力闘争ではなく、主体そのものの生成に関わる権力のはたらきに焦点が当てられているのである。

3．ジェンダー・ハビトゥスとセクシュアリティの装置

以上から、ブルデューとフーコーの権力論の差異が明らかになる。ブルデューが、実践のコンテクストをなす場で繰り広げられる主体間の権力関係を重視するのに対し、フーコーは場や主体そのものの生成に関わる権力を問題にしている。そして、この差異から、それぞれの社会分析論がジェンダーやセクシュアリティ研究にもたらす可能性と限界、そしてそれらの両立不可能性がもたらす構造的困難を説明することができるだろう。

フーコーは、「ジェンダー・ブラインド」と言われるように、たしかに『性の歴史Ⅰ』でセクシュアリティをめぐる権力関係を問題にしているにも関わらず、男女間にみられる非対称性や支配関係については触れていない。しかしこれは、主体そのものの生成を問うための言説分析の方法がもたらす必然の結果といえるだろう。主体を実践の条件とするのではなく、逆に実践を通して主体の社会的構築を暴く言説分析においては、「男」や「女」という主体の存在を前提としたうえで、両者のあいだの非対称性や、一方による他方への支配を論じることはできない。

一方、ブルデューにおいては、実践やハビトゥスの形成に先立って、社会的位置と結びついた行為者が存在する。そのため、フーコーが問題にしたような主体そのものの社会的構築を問うことは不可能である。これをジェンダー論の文脈でみると、あらかじめ「男」や「女」という行為者の存在を前提としたうえで、それぞれの性別に応じたジェンダー・ハビトゥ

スの生成について論じることになる。しかしこれでは、「男」や「女」という主体の構築を論じ損ねてしまう。

実際、ブルデューは『実践感覚』において、性的分業を通じて「男性的振舞い」や「女性的振舞い」の社会的構築に触れ、次のように述べている。

> 身体の動かし方の要素的行為（上にあるいは下に、前にあるいは後に行く、等等）、特にこの身体運動の本来的に性的な――したがって、予め生物学的に決まっている――側面に社会的意味作用と社会的価値を重ね合わせることは、身体的空間と社会的空間およびこの両空間における移動のあいだの等価性感覚を教え込み、またこれによってひとつの集団の最も基本的な構造を、情動のなかによく見られるように隠喩を真に受ける身体の本源的経験の中に根づかせることである。（Bourdieu 1980:120=115〔強調＝筆者〕）

このように、「社会的意味作用」や「社会的価値」が、「予め生物学的に決まっている」「本来的に性的な」側面に重ね合わされたものと考えると、生物学的な性差を「重ね合わせ」に先立って存在するものとして無根拠に前提してしまうことになる。そしてそれは、セックスの社会的構築を論じそびれてしまうだけでなく、ジェンダーとセックスを切り離すまさにその言説的実践のプロセスで、セックスがまとう科学に固有の機能を隠蔽し、セックスの先在性を強化してしまう行為でもある。

ブルデューは、独自のハビトゥスが機能し実践のコンテクストとなる場を、その機能の原理と規則をそれ自身のうちにもち、社会全体や他の社会的領域とは異なるそれ固有の評価基準が作用する「マクロコスモスにおける自律したミクロコスモス」（Bourdieu 2000:52=74）として捉えている。しかしこのように場の自律性を強調すると、科学的領野における性的差異の生成と、それとは異なる文脈における社会的意味や社会的価値の生成と

を同時に論じることはできない。「場の自律性」というテーゼこそ、セックス（生物学的性差）の社会的構築を問えなくしているものではないだろうか。

フーコーは『性の歴史 I』で、「セクシュアリティの装置が、その様々な戦略において、このようなセックスという観念を設置するのである」（Foucault 1976:203=194）と述べている。それは、セックスがまとう科学性、科学に固有の社会的機能と無縁ではない。セックスが「真理」という社会的機能を負うことによって初めて、告白というシステムが、教育学や精神医学など様々な領域で、主体の個別化と分類を可能にするテクノロジーとして利用可能になるのである。このように、セックスの社会的構築を明らかにするには、科学とその他の領域との相互関係、科学が科学として持ちうる社会的機能を考慮する必要がある。だが、様々な領域のあいだをめぐるその分析は、どのような場において実践として成立しうるのだろうか？また、その分析主体はどのような社会的位置を占めうるのだろうか？

ジュディス・バトラーは『ジェンダー・トラブル』（Butler 1990）において、フェミニズムが抱える構造的なトラブルについて次のように指摘している。フェミニズムは、文化的に構築された「ジェンダー」と生物学的な性差である「セックス」という概念を区別することによって、男女間にみられるジェンダーの非対称性を脱自然化し、その不当性を訴えてきた。しかし、ジェンダーを生得のセックスに書き込まれた意味としてセックスから切り離すことは、同時に、セックスを前‐言説的なものとして物象化してしまうことになる。このような物象化を、「女」の解放という名目のもと無批判に受け入れることは、「具体的な種々の『女たち』が構築される際の文化的・社会的・政治的な交錯の多様性を結果的に無視してしまうことになる」（Butler 1990:19-20=41）。この物象化から免れるためには、フェミニズムの足場となる「女」というアイデンティティが、「女」の多様性

を主張しその解放を促すはずのまさにその実践を通じて構築されるという、自らの足場の危うさを露呈させるしかない。

場の自律性を重視するブルデューの方法と、複数の場のあいだの相互関係を描き出そうとするフーコーの方法とのあいだにみられるこの両立不可能性もまた、ジェンダー・セクシュアリティ分析における構造的なトラブルを示唆しているように思われる。性別カテゴリーの構築に加担するリスクを引き受けて主体間の権力闘争を暴きだすか、自らの足場を危うくするリスクを負いながら主体化のプロセスを問うか。いずれにせよ、それは、なんらかの権力関係に巻き込まれ、分析主体自身の社会的位置を構築あるいは脱構築するリスクをともなった、ひとつの「実践」なのである。

注

1）池田・大貫は、「男／女」という性別カテゴリーの二元論を前提としてしまっていると批判している。「ブルデュー理論では、あらかじめ「男」「女」という行為者が存在したうえで、それぞれの性別に適ったジェンダー・ハビトゥスを身につけることになる。つまり、ジェンダー・ハビトゥスの形成という社会的なジェンダーに先立つものとして、性別カテゴリーが前提にされているのである。」（池田・大貫 2002）。

2）ブルデュー自身による分析（Bourdieu 1980, 1998）のほか、*Feminism after Bourdieu*（Adkins& Skeggs 2004）、江原由美子『ジェンダー秩序』（江原 2001）など。

3）たとえば、「フーコーは『セックス』と『セクシュアリティ』を、ある時代のある時期に利用可能な特殊な言説によって定義できるかのように考えていたため、男性と女性がセクシュアリティに対してとる、異質な関係性をほとんど把握することが出来ない」（Seidler 1987:104）、「フーコーは家父長制の歴史をセクシュアリティの歴史に置き換えようとして」、「権力のジェンダー化」を見ようとしていない（Hunt 1992:84）など。

4）ブルデューは、あるインタビューで「フーコーには『場』という概念が欠けている」と批判しているが（加藤 2002）が、残念ながらブルデュー自身はこの批判を詳しくは展開していない。

5）ブルデューは、ハビトゥスと場の相互作用によって、場の歴史的な生成と変容を説明しようと試みている。しかし、これに対してバトラーは、「客観的な〈場〉というテーゼが……社会的〈場〉を不変の実在として大事に抱え込む危険を冒している」(Butler 1999:117)と批判している。

6）「エピステーメー」については、歴史の非連続性に関する注目から、一時代の統一性をなすものとして捉えられることが多い。しかし、『知の考古学』によれば、「非連続性とは、単に歴史の地質学において断層を形づくる大きな諸偶然事の一つではなく、すでに言表という単純な事実のなかにあるもの」(Foucault 1969:40=46)である。むしろ、様々な差異を「時代」というたった一つの差異に収斂させないところにフーコーが描く歴史の特徴があるといえるだろう。

7）赤川は、フーコーが描く権力関係を、言説的実践の背景として捉えることの危険性を指摘している。(赤川 1999:34-35)

文献

※本拙論中の引用箇所については、これまで出版されてきた邦訳を参照させていただいたが、一部表記を変更した箇所もある。

Adkins, L.& Skeggs, B. (ed.), 2004, *Feminism after Bourdieu*, Blackwell Pub.

Bourdieu, P. 1980, *Le sens pratique*, Minuit. =今村仁司・港道隆・福井憲彦・塚原史訳、1988/1990、『実践感覚１・２』みすず書房。

Bourdieu, P. 1998, La domination masculine, Seuil.

Bourdieu, P. 2000, *Propos sur le champ politique*, Presses universitaires de Lyon. =藤本一勇・加藤晴久訳、2003、『政治―政治学から「政治界」の科学へ』、藤原書店。

Butler, J. 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Suversion of identity*, Routledge. =竹村和子訳、1999、『ジェンダー・トラブル―フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、青土社。

Butler, J. 1999, "Performativity's Social Magic", Richard Shusterman (ed.), *Bourdieu: a critical reader*, Blackwell: 113-28.

Foucualt, M. 1963, *Naissance de la clinique: une archéologie du regard médical*, Presses Universitaires de France. =神谷美恵子訳、 1969、『臨床医学の誕生

—医学的まなざしの考古学』、みすず書房。
Foucault, M. 1966, *Les mots et les choses*, Gallimard. =渡辺一民・佐々木明訳、1974、『言葉と物』、新潮社。
Foucault, M.1969, *Archéologie du savoir*, Gallimard. =中村雄二郎訳、1995、『知の考古学』、河出書房新社。
Foucault, M. 1976, *Histoir de la sexualité I: Volonté du savoir*, Gallimard. =渡辺守章訳、1986、『性の歴史Ⅰ　知への意志』、新潮社。
Hunt, L. 1992, "Foucault's Subject in The history of Sexuality", Stanton, Donna, C. (ed.), *Discourses of Sexuality: From Aristotle to AIDS,* Univ of Michigan Press.
Seidler, V. J. 1987, "Reason, Desire, and Male Sexuality", Caplan, Pad (ed.), *The Cultural Construction of Sexuality,* Routledge.
赤川学、1999、『セクシュアリティの歴史社会学』、勁草書房。
池田心豪・大貫挙学、2002、「バトラーのブルデュー批判から見えること—社会的位置の構築と主体（化）をめぐる問題」、『現代社会理論研究』(12):89-100。
江原由美子、2001、『ジェンダー秩序』、勁草書房。
遠藤知己、2000、「言説分析とその困難—全体性／全域性の現在的位相をめぐって」、『理論と方法』15(1)、49-60。
加藤晴久(編)、2002、『ピエール・ブルデュー—1930-2002』、藤原書店。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Power, Field and Subject
—Social Analyses of Foucault and Bourdieu—

Eri MATSUKAWA

Michel Foucault and Pierre Bourdieu both revealed social powers that govern the way we live and the way we think. But when we focus on "field", there is a difference between their views of power, which suggests two incompatible ways to analyze gender and sexuality.

According to Bourdieu the *habitus* presupposes the field as the condition of its own possibility. So behavior of agents is determined by their position in the relational structure of characteristic forces of the field. As a result, while analyzing the cultural inscription of meaning on a sex, he fails to take account of the way in which sexes, positions of subject, are themselves constructed.

Foucault, on the other hand, considered fields and positions of subject as effects of social practices limited by 〈power-knowledge〉. His method of discursive analysis enables to analyze how the "sex" is constructed in the interplay of strategies of fields, instead of how the cultural meanings are inscribed on "prediscursive" sexes.

This incompatibility tells us that such social analyses are themselves "practices", each involved in social power, with construction or deconstruction of subjects in the very process of them.

Keywords : power, field, position of subject, gender, sex